

Title	最近十年間に於ける物価騰貴
Sub Title	
Author	オイレンブルグ
Publisher	三田学会
Publication year	1913
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.7, No.4 (1913. 10) ,p.783(161)- 798(176)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19131022-0161

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ことは吾妻鏡によるも此國より東大寺にて材木を切り出した記事も見えてゐる。

この妻(時政後妻牧の方)は大舍人允宗親賴盛入道がもとに多年つがひて駿河國大岡の牧と云所をしらせけり、武者にもあらぬかゝる者の中にかゝる果報の出くるふしぎの事也。(建保三年千〇三年)(六卷)

當時しらせるとは或る領内を支配するの意で文官たる宗親は公家の頼通の家來であるは當時に於てすら珍らしかつたと見える、大岡の牧とは一庄らしく見えるけれども我國で馬の需用は中々京都に多かつたので頼長は其莊園より馬を得んとし、遠きは頼光は道長に百頭も馬を送つてゐる。今に於いても牧に對する規定があり、この牧を治める必要もあつたのだ。牧は放牧の爲めに多くの面積を要する、これは人々に多くなるに随ひ開墾せらることもある。されば牧が變じて莊園領となるもあたり前である。宗親は

牧の支配者と云ふより牧より開墾した莊園(廣義には牧も莊園なれども)に牧の名だけが残つてゐるを支配するとの意ではなからうか。

又武士將軍をうしないて我身にはおそろしき物もなく地頭々々としてみな日本國の所當とありもちたり、院の御ことをば近臣のわき地頭の得分にてこそぐればえますと云事なし。

地頭得分に關して史學雜誌に黒板博士の論はあるから重ねて論ずる必要はない。守護地頭に關しては星野博士の考證もあり。古來武家名目抄にも詳はしく論じてあるから再述の必要はない。たゞ『將軍うしないて』云々は實朝死後の天下の有様を作者は實見し之を論じた所に價値あるのである。吾妻鏡は北條氏の爲めに甚しく曲筆を弄してゐるので源氏に代はり北條氏が實權をにぎり、天下の將士悉く其命をきく如くかいてゐるが何を計らん、この著者は之を素破抜いて天下の事情を明かにしてゐる。北條氏は階級

最近十年間に於ける

物價騰貴

オイレインブルグ

(本篇は Prof. Dr. Franz Eulenburg: Die Preissteigerung des letzten Jahrzehnts. 1912 の大要を解説せるものなり。オイレインブルグの主張中には多少誤れる所もあれど、氏の研究は獨逸文にて著はされたる物價騰貴論の白眉と看做す可きものなるに依り、其大要を紹介すること、せり。高城)

目次

- 一 物價騰貴の事實
- 二 物價騰貴の原因
 - 甲 供給と生産費
 - 乙 需用
 - 丙 貨幣價値の變動
- 三 物價騰貴の影響

一、物價騰貴の事實

物價騰貴に固づく生活難の聲は各時代に於て繰返へざる、事實にして決して新らしきことに

門閥を重んずる當時では天下を服するには困難なるは明かで地頭はこの際充分地方に於ける根據を固めたので封建制の確立は却つて此時であるかも知れぬ。南北朝頃には守護地頭などの地方に於ける勢力は確かなものとなつてゐる。莊園の發達より大名の地方に於ける勢力確立の次第は愚管鈔中注目すべきであつて此著者は思想經濟の兩方面を統合して歴史的開展を論じたる獨創は驚くべきである。

非ず。抑も物價の騰貴と云ひ、下落と云ふも、皆是れ相對的の觀念に對して、經濟的價値の絶對的標準なるものあることなし。吾人は金貨の量目が今も昔しと同一にして且つ同一の稱呼を有するを見て、其金貨が今も昔しと同一の價値又は購買力を有せりと早合點するの常なれど、此見解は誤れり。若しカントがケニスベルグ大學の教授として八百ターレルの年俸を有したりとせば、此收入は其當時に於ける貨幣と比較せざる可からず。然るに此貨幣の價値は近來大に下落せり。而かも、吾人は貨幣所得との比較上或る貨物の價格が騰貴せしか、或は又貨幣價値其物が下落せしかを講究せざる可からず。

軌近物價の騰貴せしは疑ふの餘地なく、從つて生計費の騰貴を訴ふる者を生せしが、嚴密なる意味に於ては、物價騰貴並に生活難は頗る複雑なる問題なり。如何となれば、或る貨物の價格が十年前よりは騰貴せりとするも、其貨物の

品質又は量目等に相違せる點なきを保せず。又貨幣所得に比較して物價が騰貴し、從つて所謂生活難を醸したるとするも、今は昔よりも生活の標準が向上せることを顧慮せざる可からず。例へば、家屋が改善せられ、家具は一層便利となり、衣服の仕立と材料が優美と爲り、石油ランプの代りに瓦斯電燈を使用し、市中に公園が設置せられ、其街路には夜間點燈するが如し。要するに、貨幣購買力の一般的變動は之を知るに由なし。如何となれば、貨幣購買力の一般的變動は貨物の品質と數量とが變動せざることを假定せるものなれど、此兩者は常に變動するものなれば也。されば、吾人の研究す可きは或る特定の貨物に對する貨幣購買力の變動即ち是れ也。殊に吾人の知らんと欲する所は以前と同一額の貨幣所得を以て矢張り以前と同質同量の貨物を購入し得るやにあり。而して消費財の價格と一般貨物の價値とは必ずしも同一に變動するも

のに非ずして、後者は前者よりも大なる問題なりとす。

一家の生計費中にて最も重要なるものは食料費並に家賃なるが、生計費全體に對する食料費の割合は所得の大小に依りて非常なる差あり。最下層社會に於ける此割合は約五割にして、家賃は薪炭燈火費を加ふれば全家計費の約二割なり。されば獨逸に於ては下層社會が食料並に家賃に對して支拂ふ金額は總家計費の約三分の二なりと謂ふを得べし。而して此支途即ち食料費と家賃は近年著しく騰貴せるが如くなるを以て此點よりして下層社會の生計費には増加せりと云ふべし。然りと雖も、之を以て直ちに物價の一般的平準が騰貴せりとは云ふ能はざる也。物價の一般的騰落を知る爲めに物價指數なるものを用ゆ。物價指數は重要なる貨物を選びて其價格が或る一年度より他の一年度迄に變動せる割合を平均せるものなり。此物價指數に計上

する貨物は國民經濟上重要なる地位を占め、其品質の變更せられざるものたるを要するのみならず、夫れに對して比較的長年月の間其價格の統計が保存せらるゝものたる可し。獨逸に於ては此種の統計並に是れに關する學術は左程發達せざるが英國及び合衆國は此點に於て世界に冠たり。合衆國の物價指數は最も大仕掛にて、アルドリッチ報告書中に於けるフオークナーの物價指數は二百三十二種の貨物を挙げ、現今に於ては二百五十七種を計上せり。獨逸に於ては曾てソトピアはハンブルグの物價を基礎として百十四種の貨物の物價指數を作りたりしが、其後コンラッドは此指數を繼續せり。されば、獨逸、英、米に於ける指數の多くは二十乃至四十種の貨物を編入するに過ぎず。要するに、物價指數は市場に於て取引せらるる貨物の種類の中にて單に一少部分を計上するに過ぎざれども、猶ほ一般的傾向を示すに足れり。

物價指數の作製上に於て特に注意すべき事あり。其一は物價指數の基點なりとす。物價平準の騰落を計出するに當りて、若し物價の高き年度を標準とせば、物價指數は比較的低く、又之に反して物價の低き年度を標準とせば、物價指數は比較的高かる可し。英國の『サワベック指數』は前世紀中にて物價の最も高かりし時代即ち一八六七—七七年代を基點とし、『エコノミスト指數』は物價騰貴の初期なる一八四五—五〇年代を基點とせるの結果、今日に於ては『サワベック指數』は『エコノミスト指數』よりも低き物價平準を表はせり。

次に物價指數作製上注意すべき點は何處の價格を標準と爲す可きやの問題なり。同品質を有する同種類の貨物にても、場所によりて其價格を異にせり。されば、獨逸に於て同一貨物の最低最高の價格の平均を取りて之を標準とせるは至當の處置と謂ふ可し。

又、如何なる貨物及び幾種の貨物を物價指數に編入す可きかは重大なる問題なりとす。甲國に取りて重要な貨物は乙國に取りて重要なならざることあり、從つて甲國に適する物價指數は乙國に適せざることあり。要するに、吾人は各國に於ける物價平準の一般的傾向を比較し得るに過ぎず。又、單に少數の物價を平均する場合に比較的重要ならざる貨物の價格が激變せりとせば、其結果、物價指數をして餘り信賴するに足らざるものたらしむるの虞れあるも、此弊害を除くには所謂重算式平均法なるものを用ゐ、物價指數に計上する貨物の價格に各其貨物の取引高を乗じたる積の平均を求むるを可とす。然りと雖も、若し物價指數に計上する貨物の種類にして其數多ければ、單式平均法を用ゆるも、將た又複式平均法即ち重算式平均法を用ゆるも、其結果には左程の相違を來さざる可し。終りに吾人は貨幣價值の問題に就て更に一言

せんと欲す。貨幣價值とは貨物に對する貨幣の

交換比例の意義にして、從つて物價が騰貴せると云ふことは貨幣の價值下落を意味せるなり。而して貨幣の價值が下落せる原因が貨物側に在るや、將た又貨幣側に在るやの問題と貨幣其物の價值が騰貴せるや將た又下落せるやの問題とは異なる問題なりとす。されば、吾人は貨幣價值の下落の原因、換言すれば物價騰貴の原因が貨物側に生じたるや將た又貨幣側に生じたるやを探究する前に先づ物價騰貴の事實其物を確めんと欲す。

物價變動の事實 過去百年間に物價平準は二回下落して二回騰貴せり。最初は一八一五年より一八五〇年頃迄物價は下落し、一八五〇年頃より一八七三年迄は騰貴の一方なりしが、同年後一八九五年迄又々下落したるも、一八九六年より再び騰貴せり。其後屢々物價は多少下落せしことありしが、其一般的傾向は常に騰貴にし

て、今日に至るも猶ほ其趨勢に變化なし。

此物價騰落の趨勢に就きて特に吾人の注目を要する二個の現象あり。一は物價の騰貴が經濟界の繁盛と略ぼ同時に起り、且つ物價の下落が經濟界の沈靜と略ぼ同時に起れるを見たるも、此關係たるや左程密接なるものに非ずして、時として經濟界の繁盛なる時代に物價が下落し又經濟界の沈靜なる時代に物價の騰貴せしことあり。例へば、一八八八—九〇年の繁盛期に物價下落の趨勢は單に一小頓挫を來したるに過ぎず。要するに經濟界の消長とは獨立に物價平準が或は昇騰し或は低落することあるあり。

次に物價騰貴に就きて吾人の注目すべき點は此騰貴の趨勢が萬國共通の現象なることなり。左に掲ぐる表は英、獨、米に於ける最近の物價指數(每五年)を示す。(一八九〇—一九九年に於ける米國の物價を百として他の物價指數を換算せり)

英 國		獨 逸	
サワベ	ツク	商務院	帝國政府
エコノ	ミスト	シミツ	勞働局
一九〇一—五	一九〇一—五	一九〇一—五	一九〇一—五
一九〇六—一〇	一九〇六—一〇	一九〇六—一〇	一九〇六—一〇
一九一〇—一五	一九一〇—一五	一九一〇—一五	一九一〇—一五
一九一五—二〇	一九一五—二〇	一九一五—二〇	一九一五—二〇
一九二〇—二五	一九二〇—二五	一九二〇—二五	一九二〇—二五
一九二五—三〇	一九二五—三〇	一九二五—三〇	一九二五—三〇
一九三〇—三五	一九三〇—三五	一九三〇—三五	一九三〇—三五
一九三五—四〇	一九三五—四〇	一九三五—四〇	一九三五—四〇
一九四〇—四五	一九四〇—四五	一九四〇—四五	一九四〇—四五
一九四五—五〇	一九四五—五〇	一九四五—五〇	一九四五—五〇
一九五〇—五五	一九五〇—五五	一九五〇—五五	一九五〇—五五
一九五五—六〇	一九五五—六〇	一九五五—六〇	一九五五—六〇
一九六〇—六五	一九六〇—六五	一九六〇—六五	一九六〇—六五
一九六五—七〇	一九六五—七〇	一九六五—七〇	一九六五—七〇
一九七〇—七五	一九七〇—七五	一九七〇—七五	一九七〇—七五
一九七五—八〇	一九七五—八〇	一九七五—八〇	一九七五—八〇
一九八〇—八五	一九八〇—八五	一九八〇—八五	一九八〇—八五
一九八五—九〇	一九八五—九〇	一九八五—九〇	一九八五—九〇
一九九〇—九五	一九九〇—九五	一九九〇—九五	一九九〇—九五
一九九五—〇〇	一九九五—〇〇	一九九五—〇〇	一九九五—〇〇

右表に示すが如く、米國の物價は最も高く、獨逸の物價は之に次ぐ。最近に於ける此物價騰貴は未だ千八百七十年代の初期の夫れに及ばずと雖も、近來貨幣の購買力が世界的に下落したるは疑ふの餘地なし。又此物價騰貴は凶作、價格協定、保護關稅、カル

テル等の局部的原因の醸したるものに非ざるは明かなり。此等の諸原因は多少或は物價騰貴の程度を變更又は緩和せしむるに力ありたる可しと雖

獨逸		帝國政府		合衆國		英 國	
食料品	原料	食料品	原料	食料品	原料	食料品	原料
一九〇一—〇五	一九〇一—〇五	一九〇一—〇五	一九〇一—〇五	一九〇一—〇五	一九〇一—〇五	一九〇一—〇五	一九〇一—〇五
一九〇六—一〇	一九〇六—一〇	一九〇六—一〇	一九〇六—一〇	一九〇六—一〇	一九〇六—一〇	一九〇六—一〇	一九〇六—一〇
一九一〇—一五	一九一〇—一五	一九一〇—一五	一九一〇—一五	一九一〇—一五	一九一〇—一五	一九一〇—一五	一九一〇—一五
一九一五—二〇	一九一五—二〇	一九一五—二〇	一九一五—二〇	一九一五—二〇	一九一五—二〇	一九一五—二〇	一九一五—二〇
一九二〇—二五	一九二〇—二五	一九二〇—二五	一九二〇—二五	一九二〇—二五	一九二〇—二五	一九二〇—二五	一九二〇—二五
一九二五—三〇	一九二五—三〇	一九二五—三〇	一九二五—三〇	一九二五—三〇	一九二五—三〇	一九二五—三〇	一九二五—三〇
一九三〇—三五	一九三〇—三五	一九三〇—三五	一九三〇—三五	一九三〇—三五	一九三〇—三五	一九三〇—三五	一九三〇—三五
一九三五—四〇	一九三五—四〇	一九三五—四〇	一九三五—四〇	一九三五—四〇	一九三五—四〇	一九三五—四〇	一九三五—四〇
一九四〇—四五	一九四〇—四五	一九四〇—四五	一九四〇—四五	一九四〇—四五	一九四〇—四五	一九四〇—四五	一九四〇—四五
一九四五—五〇	一九四五—五〇	一九四五—五〇	一九四五—五〇	一九四五—五〇	一九四五—五〇	一九四五—五〇	一九四五—五〇
一九五〇—五五	一九五〇—五五	一九五〇—五五	一九五〇—五五	一九五〇—五五	一九五〇—五五	一九五〇—五五	一九五〇—五五
一九五五—六〇	一九五五—六〇	一九五五—六〇	一九五五—六〇	一九五五—六〇	一九五五—六〇	一九五五—六〇	一九五五—六〇
一九六〇—六五	一九六〇—六五	一九六〇—六五	一九六〇—六五	一九六〇—六五	一九六〇—六五	一九六〇—六五	一九六〇—六五
一九六五—七〇	一九六五—七〇	一九六五—七〇	一九六五—七〇	一九六五—七〇	一九六五—七〇	一九六五—七〇	一九六五—七〇
一九七〇—七五	一九七〇—七五	一九七〇—七五	一九七〇—七五	一九七〇—七五	一九七〇—七五	一九七〇—七五	一九七〇—七五
一九七五—八〇	一九七五—八〇	一九七五—八〇	一九七五—八〇	一九七五—八〇	一九七五—八〇	一九七五—八〇	一九七五—八〇
一九八〇—八五	一九八〇—八五	一九八〇—八五	一九八〇—八五	一九八〇—八五	一九八〇—八五	一九八〇—八五	一九八〇—八五
一九八五—九〇	一九八五—九〇	一九八五—九〇	一九八五—九〇	一九八五—九〇	一九八五—九〇	一九八五—九〇	一九八五—九〇
一九九〇—九五	一九九〇—九五	一九九〇—九五	一九九〇—九五	一九九〇—九五	一九九〇—九五	一九九〇—九五	一九九〇—九五
一九九五—〇〇	一九九五—〇〇	一九九五—〇〇	一九九五—〇〇	一九九五—〇〇	一九九五—〇〇	一九九五—〇〇	一九九五—〇〇

も、貨幣購買力下落の共通的原因たることを得ざるなり。千八百七十三年後二十餘年間に於ける物價の下落を醸したる原因は國際貿易の發達、器械の應用、大企業の勃興、運送費の低減、原料供給の増加、生産技術の改良等なりしが、過去十年間に於ても此等物價下落の諸原因の猶ほ依然として存在せるにも拘はらず物價は却つて騰貴せり。是れ何が故に然るや。

物價騰貴の内容 物價が最近十年間に於て騰貴せるは上述の如くなるも更に其騰貴を解剖すれば左の如し。

即ち何れの場合に於ても原料は食料品よりも著しく騰貴せるを見るなり而して食料品をば更に分ちて穀物、動物性食品、殖民地産物(珈琲、

茶、米、胡椒、煙草)の三種とし、原料を織物の原料、金屬、燃燈用品の三種に分てば、左の如き結果を得るなり。

獨逸		帝國政府		合衆國		英 國	
穀物	動物性食品	殖民地産物	織物の原料	金屬	燃燈用品	穀物	動物性食品
一九〇一—〇五	一九〇一—〇五	一九〇一—〇五	一九〇一—〇五	一九〇一—〇五	一九〇一—〇五	一九〇一—〇五	一九〇一—〇五
一九〇六—一〇	一九〇六—一〇	一九〇六—一〇	一九〇六—一〇	一九〇六—一〇	一九〇六—一〇	一九〇六—一〇	一九〇六—一〇
一九一〇—一五	一九一〇—一五	一九一〇—一五	一九一〇—一五	一九一〇—一五	一九一〇—一五	一九一〇—一五	一九一〇—一五
一九一五—二〇	一九一五—二〇	一九一五—二〇	一九一五—二〇	一九一五—二〇	一九一五—二〇	一九一五—二〇	一九一五—二〇
一九二〇—二五	一九二〇—二五	一九二〇—二五	一九二〇—二五	一九二〇—二五	一九二〇—二五	一九二〇—二五	一九二〇—二五
一九二五—三〇	一九二五—三〇	一九二五—三〇	一九二五—三〇	一九二五—三〇	一九二五—三〇	一九二五—三〇	一九二五—三〇
一九三〇—三五	一九三〇—三五	一九三〇—三五	一九三〇—三五	一九三〇—三五	一九三〇—三五	一九三〇—三五	一九三〇—三五
一九三五—四〇	一九三五—四〇	一九三五—四〇	一九三五—四〇	一九三五—四〇	一九三五—四〇	一九三五—四〇	一九三五—四〇
一九四〇—四五	一九四〇—四五	一九四〇—四五	一九四〇—四五	一九四〇—四五	一九四〇—四五	一九四〇—四五	一九四〇—四五
一九四五—五〇	一九四五—五〇	一九四五—五〇	一九四五—五〇	一九四五—五〇	一九四五—五〇	一九四五—五〇	一九四五—五〇
一九五〇—五五	一九五〇—五五	一九五〇—五五	一九五〇—五五	一九五〇—五五	一九五〇—五五	一九五〇—五五	一九五〇—五五
一九五五—六〇	一九五五—六〇	一九五五—六〇	一九五五—六〇	一九五五—六〇	一九五五—六〇	一九五五—六〇	一九五五—六〇
一九六〇—六五	一九六〇—六五	一九六〇—六五	一九六〇—六五	一九六〇—六五	一九六〇—六五	一九六〇—六五	一九六〇—六五
一九六五—七〇	一九六五—七〇	一九六五—七〇	一九六五—七〇	一九六五—七〇	一九六五—七〇	一九六五—七〇	一九六五—七〇
一九七〇—七五	一九七〇—七五	一九七〇—七五	一九七〇—七五	一九七〇—七五	一九七〇—七五	一九七〇—七五	一九七〇—七五
一九七五—八〇	一九七五—八〇	一九七五—八〇	一九七五—八〇	一九七五—八〇	一九七五—八〇	一九七五—八〇	一九七五—八〇
一九八〇—八五	一九八〇—八五	一九八〇—八五	一九八〇—八五	一九八〇—八五	一九八〇—八五	一九八〇—八五	一九八〇—八五
一九八五—九〇	一九八五—九〇	一九八五—九〇	一九八五—九〇	一九八五—九〇	一九八五—九〇	一九八五—九〇	一九八五—九〇
一九九〇—九五	一九九〇—九五	一九九〇—九五	一九九〇—九五	一九九〇—九五	一九九〇—九五	一九九〇—九五	一九九〇—九五
一九九五—〇〇	一九九五—〇〇	一九九五—〇〇	一九九五—〇〇	一九九五—〇〇	一九九五—〇〇	一九九五—〇〇	一九九五—〇〇

右表に示せるが如く、動物性食品は騰貴せるも、殖民地産物は下落せり。又穀物の騰貴は動物性食品騰貴の程度に及ばざるなり。原料品の内織物原料と金屬は暴騰せるも、燃燈用品の騰貴は前者の夫れに及ばざるを見る要するに、殖民地産物を除けば、動物食品(肉類、牛酪、豚脂)織物原料(棉花、

羊毛、大麻、獸皮、毛皮、并に金屬（鐵、銅、亞鉛、白葉鐵）は騰貴せるのみならず、他の貨物も一般に騰貴の傾向を有したりき。換言すれば、千九百九十七年以來原料、食料品に對する貨幣の購買力は滔々として下落せり。

而して此物價の騰貴が貨幣側に生じたる原因に依りて誘致せられたるものなるや將た又貨物側の原因の醸したるものなるやは吾人の次に研究せんと欲する所なり。

二、物價騰貴の原因

物價騰貴の現象は上文に詳述せる所なるが、其原因に至りては正確に知る由なく、單に之を推定し得るに過ぎざるなり。然りと雖も、其原因が各國共通の性質を帯びるものにして、投機、保護關稅、カルテル、凶作、賃銀の騰貴等の局部的のものに非ざるは明か也。尤も此種の原因が或る特定の國に於ける物價騰貴をして一層急激

ならしめたることある可きは勿論なりとす。

甲 供給と生産費

物價騰貴が貨物供給の減退より生じたる現象に非ざるは明かなり。如何となれば、食料品并に原料の供給は増加したるを以て也。然れども貨物の生産費が或は増加せるやも知る可からずして、此意見を懐く者あるが如し。即ち賃銀の騰貴并に收穫遞減の法則の適用の爲め物價が騰貴するに至りたりと云ふ者あり。而かも此説は事實と符合せざるを奈何せん。土地開墾の面積は増加し、生産技術は改良せられ、運賃は輕減せられたるの結果食料品并に原料の供給増加せるを以て、物價は寧ろ下落す可き筈ならずや。一派の論者は物價騰貴を以てカルテルの商策に歸せりと雖も、カルテルの殆んど存在せざる英國に於て物價が他國に於けると同じく騰貴せるのみならず、上掲の騰貴せる貨物はカルテルの取引せるものに非ざるを奈何せん。

物價騰貴の原因として賃銀の騰貴を云々する者ありと雖、此説は左程有力なるものに非ず。

賃銀が一旦騰貴せば、物價の騰貴を助勢す可きものなるも、賃銀騰貴其物の一原因は之を物價騰貴に求めざる可からず。且つ賃銀の騰貴は生産組織の改善を促がし、精練労働者の代りに不精練労働者を使用することを奨励するの傾向あるを以て賃銀の騰貴は必ずしも物價の騰貴を誘致せざるなり。殊に物價騰貴の際に賃銀の下落せしことあると同時に物價の下落せし際に於て賃銀の騰貴せし例あるを以て、賃銀の騰貴は之を物價騰貴の一般的原因と看做すことを得ざる也。

然りと雖も、供給の増加するに従ひ、生産状態が益々不利となり、所謂限界生産費が愈々増加す可きは明かなり。而して此限界生産費の増加すると共に價裕も亦騰貴せざるを得ず。

鐵は既に此状態に在る貨物の一例なり。英國

並に白耳義のみならず獨逸も亦益々各其製鐵の原料を外國に仰がざる可からざるに至れり。又西班牙並に北米合衆國に於て生産せらるる鐵の品質が粗惡になれりとの評あり。要するに益々粗惡なる鐵鑛の採掘せらるると同時に其生産費は増加しつゝあり。

銅も亦鐵と同じく其採鑛益々困難となれり。千八百八十年代には銅鑛の深さは地上より一千呎なりしに今は二千呎の地下を發掘しつゝあり北米モンタナ州に於て最初採鑛せし含銅鑛は三割五分乃至五割の銅を含有せしも、現今採取せらるる銅鑛は僅かに三分の銅を含めるに過ぎず又ミシガン州に於ける鐵の總生産費は一斤に付左の如く増加せり。

生産費	市價
一九二一年	一〇・三二
一九〇〇年	一一・三六
一九〇一年	一一・〇〇
一九〇六年	一四・八七

棉花も亦同一状態に在りと謂つ可し。棉花の

供給が確實ならずして時には凶作の爲め激減することあるのみならず、一方に於て其需用が到る處に増加しつゝあると同時に、又一方に於ては世界の最大棉花供給なる米國が益々自國にて棉花を消費しつゝあるの結果、其市價は騰貴するに至れり。

食料品も亦同じ。家畜の頭数は増加せしめ其需用の増加に及ばず。穀物並に材木に就きて云ふも亦同じく、此等の貨物は既に收穫遞減の法則の適用を受けつゝあり。

乙 需用

生産の増加が物價に及ぼしたる影響は右に説述せる如くなるが、次に吾人は需用と物價との關係を論せんと欲す。されば、此關係をば第一國際的需用の増加、第二内地需用の増加及び第三所得の増加の順を追ふて左に略述す可し。

第一、國際的需用の増加 最近十年間に於ける著しき世界經濟の發達は國際間に於ける貨物

需用の激増を誘致せり。例へば南米諸國に於ける外資輸入、東洋諸國、殊に西比利亞、滿州、支那、波斯、印度、並に亞弗利加に於ける鐵道建設は鐵道材料及び其他の貨物の需用を増加し又南米に於ける工業の發達は原料の輸入を促せり。加之、工業の發達は原料以外に食料品の需用をも増加せざるを得ざるなり。此食料品需用の増加が物價騰貴に對して如何なる影響を及ぼすものなるかは、千九百年の小麥收穫が空前絶後の巨額に達せしにも拘らず、小麥の市價は單に僅少の下落を見たるのみならず、其年以前十箇年間の平均市價よりも寧ろ高かりし事實に想到せば明かなる可し。又一八八八—九〇年に於ける小麥の供給は一年二十億『ブッシェル』にして二十年後には三十二億『ブッシェル』に上りたるにも拘らず、小麥の市價は却つて騰貴せり蓋し供給の増加は需用の増加に及ばざりし也。又羊毛の供給は過去三十年間に於て五割増加し

鐵鑛の産額は千八百九十五年の二倍に達せり。石炭に就きて云ふも亦同じ。而かも此等貨物の市價は騰貴せるなり。是れ貨物の供給も増加せりと雖も、需用が夫れ以上に増加したるが故なり。されば、若し需用の増進するに連れて生産技術が發達するに非ざれば、物價は今後猶ほ愈々騰貴す可し。又、最近に於ける人口の増加が物價に及ぼし且つ及ぼしつゝある影響を忘却す可からず。

工業の發達と人口の都市集中とが食料品並に衣服に對する需用に變化を來たせしめたることなりとす。例へば『ライ麥』の需用は減少せるも小麥の需用は増加し、一方に於て野菜の減少せるに反し、一方に於ては蛋白質の食物に對する需用は増加せり。終りに原料の變更も亦同一の結果を齎したるを記憶せざる可からず。例へば、木材の代りに鐵、種油等の代りに石油、瓦斯又は電燈を用ゆるが如し。最近に於ける工業の發達及び進化は原料需用の激増を來したるが此等貨物の生産は既に有界的限界生産率に達せるが如し。蓋し物價の騰貴は生産が需用を満たすに足らざるに至りたるを以て、或種の貨物の使用を節約す可しとの一警告なりと謂つ可し。

第二、内地需用の増加 前述の如く貨物の國際的需用が増加せしのみならず、同一國內に於ても貨物の需用は増加せり。其原因の一は中歐諸國の村落に於けるが如く、自足經濟が進化して貨幣經濟、交換經濟と變じたるの結果、農家の供給する牛乳、牛酪等に對する支拂物件として、又労働者の給付する勤勞に對する支拂物として、種々の貨物の需用は増加するに至れること是れなり。第二の原因として擧ぐ可きことは

第三、個人所得の増加 終りに貨物の需用を増加せしめたる原因として個人所得の増加を指摘せざる可からず。近時個人の所得の増加せるは疑ふの餘地なし。而して所得増加せば、貨物

の需用も亦増加す可く、物價は從つて騰貴す可し。論者或は所得の増加せるは物價の騰貴せしが故にして、物價の騰貴せるは所得の増加せるが故に非すと云はん。然り、所得は物價騰貴の爲めに増加することあるなり。されど、若し社會の一部分、例へば企業家の所得が物價騰貴以外の或一原因の爲めに増加せば、其企業家の貨物需用は増加し、次で其影響を漸次他の階級に及ぼし、遂に社會全體の所得を増加すると同時に貨物需用を増進し、從つて物價を騰貴せしむるに至る可きを記憶せざる可からず。

丙 貨幣價値の變動

上文に於て生産費の増加と需用の増加とが如何なる影響を物價に與へしかを論せしが、吾人は次に供給と需用との連鎖なる貨幣に就きて考究する所無かる可からず。要するに、其原因の何たるを問はず、物價の騰貴と云ひ將た又下落と云ふも、共に貨幣價値の變動に依りて言ひ現

はざるものなり。換言すれば、物價の騰貴は貨幣價値の下落として現はれ、物價の下落は貨幣價値の騰貴として現はる。而して貨幣の價値は上述の如く貨物側に生じたる事故の爲めに變動することあると同時に貨幣其物の需用供給に依りて騰落するものなりとす。例へば十六世紀中に於て物價の騰貴せしは銀の一大供給の結果なり。されど、現時に在りては、金の供給の増加は貨幣の膨脹を促がし、從つて貨幣價値の下落を誘致せるものなるを記憶せざる可からず。然り而して輓近金の激増せしは疑ふに由なし左に掲ぐるは千八百八十一年以來に於ける金産出額の統計なり

年	代	單位百萬	單位壹億萬馬克
一八八一	一八八五年	二四・六	三〇・三
一八六六	一八九〇年	二六・六	五・二
一八九一	一八九五年	三九・三	二二・九
一八九六	一九〇〇年	六三・二	二〇・五
一九〇一	一九〇五年	七六・二	五三・三
一九〇六	一九一〇年	一〇四・九	八三・〇
			六四・六
			一五・三

右表に示すが如く、一八八一—一八九五年の十五箇年間に於ける金産額は七十億馬克なりしに、一八九六—一九一〇年の十五箇年間に於ける金産額は二百億馬克なれば、以前の約三倍となれり。而して一八五〇—一八九五年の四十五箇年間に於ける金産額が同じく二百億馬克なりしことに想到せば、金の産出が最近十五箇年間に於て如何に激増せしかを相像するに難からざる可し。

此著しき金産額の増加は如何なる影響を物價に及ぼしたるか。貨幣と貨物との間に於ける單純なる關係を説明する學說を貨幣數量説と云ふ此説に據れば、貨物の數量に變動なきとに於て若し貨幣の數量増加せば、物價は騰貴す可く、若し又互に之に反して貨幣の數量減少せば、物價は下落す可し。然りと雖も、信用經濟の發達せる今日に於ける貨物對支拂要具の關係は然かく單純なるものに非ざるなり。如何となれば、

手形、小切手等が貨幣の代用品として用ひられつゝあるを以て也。而かも、此複雑なる信用取引制度に於ても、貨幣の増加は物價の騰貴を誘致せざるを得ず。貨幣の増加が物價の騰貴を來さざるは貨幣の需用が同時に増加するか、或は又貨幣の代用物が比較的（取引高に對して）減少せるときに限れり。然れども、吾人は最近に於て貨幣の需用が増加し又は貨幣の代用物が比較的減少せるの事實なきを記憶せざる可からず。加之、貨幣の代用物が却つて増加せるが如し。斯かる事情の下に於て物價の騰貴せるは宜なりと謂ふ可し。物價を左右するものは累年の金産額に非ずして、金の現存量なれば、金産額が多少増加すると物價には左程影響を及ぼすものに非ずと論ずる人ありと雖も、少許の供給増加が價値に一大影響を與ふることあるのみならず、金産額の激増は金の現存量を激増せるの事實あるを奈何せん。千八百九十六年に於ける

金の現存量は百七十億馬克なりしに、千九百十年には三百十億馬克に増加せしを以て、金の現存量は十五年間に八割の増進を見たる譯なり。

又一派の論者は若し金産額の結果として貨幣の膨脹を來せせりとせば、金利は下落す可き筈なるに、割引歩合は却つて上騰せるに非ずやと云へども、吾人は金利に影響を與ふるものは支拂要具としての貨幣の數量に非ずして、金融が緩慢なるや否やの事實なるを記憶せざる可からず。蓋し物價が騰貴せば、資本と貨幣との需用は増加す可きに依り、金利は從つて騰貴するに至るなり。

更に他の方面より金産額増加の結果を見るに、金産額の増加は(一)先進國に於ける貨幣并に信用を膨脹して貨物の需用を増し、(二)金貨本位制の普及を促がし、從つて新金貨國の購買力を増進せしめ、(三)金産出地に於ける貨物の需用を増加せり。要するに金の増加、從つて貨幣の

増加は間接的に物價を騰貴せしめたり。換言すれば、貨幣の増加は貨物需用の増加を誘致し、貨物需用の増加は物價の騰貴を醸したり。

三、物價騰貴の影響

物價騰貴殊に食料品の騰貴が各個人の家計上に及ぼす影響は個人の所得の大小に依りて其程度を異にす。千二百馬克以下の年收を有する者は食料品の爲めに其所得の五割四分、三千乃至四千馬克の年收を有する者は三割八分又一萬馬克以上の年收を有する者は三割を費すを常規となすを以て、食料品の騰貴は所得の多き者よりも所得の少き者に對して大なる苦痛を與ふるものなりとす。就中、比較的金額の確定せる所得を有する者は物價騰貴の影響を最も甚だしく感ずるものなれど、勞働者は物價騰貴を口實として賃銀の増加を要求し、以て各其所得を増加するに至るべし。されば、吾人の知らんと欲する

所は所得の増加が物價騰貴に追及せしや否やにあり。英國の統計の示す所に據るに、千八百九十年より千八百九十九年に至る迄の賃銀を百とせば、一九〇一—一九〇五年間の賃銀は一〇七・二に上り、一九〇六—一九一〇年間には一一〇・二と爲れり。されど、此の騰貴は英國に於ける食料品の騰貴に及ばざるなり。輒近英國に於て勃發せし賃銀爭議は此不權衡の一結果なる可し。

終りに、物價騰貴は國民經濟の發展を誘致し且つ世界經濟の發達を助くると同時に、貨物需用も膨脹、所得并に富の増加を來したり。要するに、所得并に賃銀の増加は物價が騰貴して經濟の景氣立ちし時に於てのみ見ることを得る現象なりとす。然りと雖も、物價は今猶ほ現に騰貴しつつあれば、吾人が單に所得の増加が物價騰貴に肉迫する程度を研究するを得るに過ぎずして、物價騰貴に關する最後の斷案は之を他日

に譲らざる可からず。

物價の將來 之を要するに、現今に於ける物價騰貴の原因は種々あれど、根本的原因是資本經濟の發達にして、其最も新らしき現象たる世界經濟の發達は物價騰貴の遠因なりと謂つ可し換言すれば、物價騰貴の根本的原因是貨幣資本并に貸付資本が投入資本に變し、短期的投資が長期的投資に變せしこと是れなり。而して資本經濟をして一大發達を遂げしめたる最大原因は金の激増なりと謂ふ可し。蓋し金の増加は通貨并に信用の膨脹を誘致し、通貨并に信用の膨脹は企業熱を盛かんらしめ且つ投機心を刺戟するに至る可きを以て也。

最後に、物價騰貴の傾向が持續す可きや否やの問題は左の三個の原因が繼續す可きか否やに依りて解決せらる可し。

第一、限界費用の増加 一部の原料は益々騰貴す可し。就中、鑛物の生産は益々困難と爲り

且つ棉花、木材、羊毛に就きて云ふも亦同じ。尤も、生産技術の進歩は幾分か生産費用を軽減し、又支那及び亞弗利加の發達は或は原料の供給を増加することある可けれども、概して吾人は貨物生産費の増加を豫期するを得可し。

第二、需用の増加 歐洲に於ける人口の増加は將に其極點に達せんとせるが如し。殊に佛蘭西、瑞典并に澳太利を以て然りとす。されば、貨物需用は人口の増加の爲めに膨脹するが如きことあるまじ。然りと雖も、歐洲諸國が外國に對して債權國と爲りつゝあるの結果、歐洲に於ける貨物の需用は益々増加す可し。又支那、日本、南米諸國等の需用も漸次増加す可し。

第三、金の増加 金の産出は是迄の率を以て將來増加す可くも思はれざれど猶ほ大に増加す可きは明かなり。

斯くの如く、物價をして騰貴せしめたる諸原因が猶ほ將來に於ても依然として存在す可きも

のなるが如きを以て、現今の物價騰貴は一時的現象に非ずして、猶ほ幾年か繼續す可し。勿論、個人の所得は臆て物價騰貴と同一程度迄増加し茲に物價と所得との均衡は恢復せらるゝに至る可し。

物價が將來依然として騰貴す可きは前述の如し。然らば、之に對する救濟策は如何。尤も、如何なる手段を講ずるとも、物價騰貴の大勢を挽回することは不可能にして、單に幾分か其弊害を緩和するに止まる可し。而して此目的を達する爲めに採り得可き政策の數例を擧ぐれば内外商業政策の改善、税法及び其他國民經濟に關する法律の改正等なりとす。

國家と法(國法學研究之二節)

村田岩次郎

(本篇は「ゲオルグ・ユリネック著」近世國家の法」第二篇第十一章「國家と法」を譯出せるものなり。)

【其の一】法の問題

借而國家と法との關係を決定するに當つては、先づ其先決問題として諸種の點に於て了解するに困難なる法の性質を明かにするの必要あり。而して此の目的を達するには二様の方法を存せり。法を以て吾人人類より特立したる實界に客觀的存在を有する權力として研究するは其第一の方法にして、之に反して法を主觀的即ち內在的の現象として研究するは其の第二の方法たり。第一の方法は即ち哲學的研究法にして斯の研究法は人類の意思より特立したる法の存在を認識せんとするものなり。即ち「グロッチュース」の謂ふ所の「上帝在ま

さずとも夫れ自身に於て行はる可き法」其の物を研究するに在り。蓋し人爲の制度の優秀なる價値を研究するのみが吾人の任務にもあらざる可し。第二の研究法は法を單に心理的の、又內在的の現象として觀察するに在り。即ち法は吾人人類の觀念の一部を成し、而して又吾人の頭腦の中に存し、從て法の詳細なる規定は吾人の意識の如何なる部分を法として表現す可きかの問題に歸着するものなり。

法が吾人人類の行爲を羈束する一定の規則の集合より成ることには別に異議を存せず、然りと雖も、此の性質は宗教上の戒則、道德上の範則も亦均しく具有する所なり、然らば則ち法規の特徴は果して那邊に之を求む可きや?

抑も凡べての行爲は一定の目的を有するものなるが故に、法を他の範則より區別す可き標準も亦之れを法の目的に求むるは當を得たるが如し。此の法の目的に付ては萬人容易に一致する